歳時世相篇

⑩

【阪神淡路大震災】

冬の灯り、震災の記憶

林 勲男（はやし いさお）
本館民族社会研究部

一二月から一月にかけての神戸は、さまざまな光の造形に彩られる。それは繁華街の華やいだ装飾や、クリスマスのちょっと心が躍るようなイルミネーションとも違っている。今、ここにいる自分や家族、そしてかつて共にいた人びとに、改めて思いをはせる時間を与えてくれる。

光の回廊

一二月、旧居留地内の仲町通り沿いから神戸市役所の南にある東遊園地まで、幾何学模様で構成された光のアーケードが登場する。期間中の夕方には、イルミネーション点灯の瞬間を見ようと、多くの人びとがその時を待ちかまえている。そして、点灯とともに大きな歓声があがる。

イタリア出身のヴァレリオ・フェスティ氏をアートディレクター、今岡寛和氏をプロデューサーとしたこのイベントは、当初は東京を開催地として企画されたものであった。しかし阪神淡路大震災が発生したため、今岡氏の故郷である神戸に変更し、鎮魂と追悼、街の復興を祈念し、一九九五年一二月に神戸ルミナリエとしておこなわれるようになった。

第一回の来場者数こそ二五〇万人ほどであったが、第三回以降は四〇〇万人から五〇〇万人を記録している。神戸市や兵庫県以外からも多くの来場者を集めるようになった一方、回を重ねるにしたがって、震災の犠牲者の鎮魂と追悼、街の復興祈念という目的は、来場者の意識からは薄らいできていることは確かである。

震災体験者の中には、無残な傷跡がまだ多く残る街で開催された、第一回ルミナリエの整然とした灯りの造形に、生活再建への希望の光を見ようとした思いを、会場に足を運ぶことで新たにしようとする人びともいる。他方、眩いばかりのイルミネーションの光は、未明の暗闇や倒壊した建物に閉じ込められた時の閉塞した闇の記憶と、あまりの対照をなすがゆえ、かえってあの朝の体験を呼び起こされてしまうと、敬遠する人もいる。

来場者のなかには、ルミナリエをクリスマス・イベントととらえている人もいるかも知れないが、震災体験者にとって、それが意味するところは人それぞれに大きい。

歴史のモニュメント

光のアーケードを通り抜けると、メイン会場である東遊園地に到着する。そこには、ヨーロッパの古い広場を思わせるように、建物のファサードのようにイルミネーションが並ぶ。

ルミナリエを背景に「1・17　希望の灯り」は静かに燃える（2008年12月）

この東遊園地は、一八六八年に日本で最初の西洋式公園として開園した。当初は旧生田川の堤防敷に、神戸居留地開設後まもなく造られた外国人専用の運動公園であり、「外国人居留遊園」とか「内外人遊園地」とよばれていた。一八九九年、不平等条約の改正により外国人居留地は廃止されたが、この公園は旧居留地の東にあったことから、後に「東遊園地」とよばれるようになった。

園内には、ポルトガル総領事を務め、日本についての著作も多いヴェンセスラウ・デ・モラエスの胸像や「ボウリング発祥の地の碑」、「近代洋服発祥地の碑」など、明治以来の国際都市・神戸の歴史を垣間見せている。

阪神淡路大震災の発生により、東遊園地には新たな記念碑が加わることとなった。一つは「一・一七　希望の灯り」という、ガラスケースにおおわれたガス灯である。震災五周年にあたる二〇〇〇年一月一七日に灯りがともされた。その御影石の台座には、次の碑文が記されている。

一・一七　希望の灯り

一九九五年一月一七日午前五時四六分
阪神淡路大震災
震災が奪ったもの
命　仕事　団欒（だんらん）　街並み　思い出
…たった一秒先が予知できない
人間の限界…
震災が残してくれたもの
やさしさ　思いやり　絆（きずな）　仲間
この灯りは
奪われた
すべてのいのちと
生き残った
わたしたちの思いを
むすびつなぐ

同じ公園の敷地内、「一・一七　希望の灯り」のすぐ近くにある噴水は、地下に降りてみると、それが「慰霊と復興のモニュメント」であることがわかる。震災で亡くなった人びとの名前を刻んだプレートが内部の壁面に並んでいる。おそらく、身内を亡くした方であろう、プレートの名前をゆっくりと指でなぞっている姿を見かけたことが何度かある。

追悼の時、広がる絆

毎年一月一七日の早朝、「一・一七　希望の灯り」からロウソクに移された火は、東遊園地内西側の広場に運ばれ、各地から届けられた竹製の灯籠にともされる。真冬の早朝、張りつめた冷気の中、約一万本の柔らかな温かみのある灯りが、「1・17」の日付を浮かび上がらせていく。この日、この時間、阪神淡路大震災の被災地となった多くの場所で、同様の行事が静かに執りおこなわれる。

二〇〇七年一月一七日、黄色いウィンドブレーカーを着た約二〇名の一団が、東遊園地の灯籠の点灯に参加していた。二〇〇四年一〇月に起きた新潟県中越地震の被災地のひとつ、川口町木沢集落からの一行である。ボランティアとして木沢で活動していた大阪大学の学生たちや、西宮市の復興住宅に暮らす被災者との交流のため、前日に雪の中越を発ち、神戸入りしていた。

同じ年の一〇月二三日、今度は西宮市の復興住宅に暮らす一七名が、震災四周年を迎えた木沢を訪れた。一行は片道八時間の長旅の疲れも見せず、米の収穫を終え、冬仕度に入った山間の集落での再会を、木沢の人びとと共に喜び合った。

一九九五年一月一七日午前五時四六分。その時からまもなく一四年が経とうとしている。今年は、どのような新しい出会いがあるのであろう。